

## テントウムシの民俗資料

### 相坂 耕作

#### 1. はじめに

姫路昆虫同好会の会誌名は「てんとうむし」である。この会誌名は誰でも知っている馴染みのよい昆虫をということを決まった訳だが、「てんとうむし」に関する記事は会誌上では創刊号しか登場していない。会誌名になっている以上無視するとテントウムシにも失礼になるので筆者の私設「播磨昆虫民俗資料館」にあるテントウムシ標本をはじめテントウムシグッズを順次紹介すると共に、テントウムシのいろいろを探ってみることにした。

#### 2. テントウムシの名前

テントウムシの名前について筆者はテントウムシが指先から太陽に向かって飛んでいくため天の道の虫ということで天道(てんとう)虫や中国語の「瓢虫」、また、レディパードの英名くらいしかしなかった。しかし、小畑晶子氏が「昆虫と自然」(1998)誌上に詳しく書かれていることがわかったので紹介したい。

Lady(レディ)は聖母マリアを意味し、「聖母マリアの鳥」となる。ドイツ語では Marienkafer(マリアの甲虫)、フランス語では Beta a bon Dieu(神様の虫)となり、ロシア、スペイン、スウェーデンなども同様な意味で呼ばれているという。また、戦国時代にキリシタンが旧約聖書の神エホバの日本語訳として「てんとう」という言葉を採用したという。

#### 3. テントウムシの分布

「あなたとわたしが夢の国 森の小さな教会で結婚式をあげました」これは、チュリッシュの歌った「てんとうむしのサンバ」の一節である。テントウムシは丸いからだに赤い紋が動物の中ではユニークで可愛らしく、小柄ながら印象のこる昆虫であるがゆえ可愛い歌になっている。また、18円通常切手にナナホシテントウとナミテントウが採用されたり、41円のかもめーるのハガキにもナミテントウが描かれたりした。多くの種類が肉食で幼虫も成虫もアブラムシ、カイガラムシ、ハダニ、ハゴロモ、菌類などを食べ、害虫などの大発生をおさえる天敵として重要なはたらきをし、人間にとって役にたつからより愛される要素ともなっている。テントウムシにはジャガイモやナスなどの植物の葉を食べる、いわゆる悪玉のテント

ウムシもみられる。

日本のテントウムシがまとめられたのは Lewis(1896)で57種が整理され、日本人による研究は名和梅吉(1899)によって始まった。テントウムシの種類は1943年には80種に達し、現在では178種(亜種を加えると180種)が知られ世界には5000種もいるというが、そのうち播磨地方には数十種のテントウムシが分布していると思われる。しかし、残念ながらテントウムシの分布を記録した文献は少なく、そのうえ筆者も専門的に調査したこともなく、採集のついでにいわば内職的に分布調査したものである。それ故、資料不足の感はまぬがれないが、県下の甲虫類のファウナに最も詳しい高橋壽郎氏が兵庫生物に執筆された兵庫県産テントウムシ(1958)を資料として使わせていただきリストを作成した。

#### \* 播磨地方テントウムシ分布リスト

トホシテントウ

*Epilachna admirabilis* Crotch

オオニジュウヤホシテントウ

*Henosepilachna vigintioctomaculata* Motschulsky

ニジュウヤホシテントウ

*Henosepilachna vigintioctopunctata* (Fabricius)

キイロテントウ

*Illeis koebeleii* Timberlake

カメノコテントウ

*Aiolocaria hexaspilota* (Hope)

ハラグロオオテントウ

*Callicaria superba* (Mulsant)

ナミテントウ

*Harmonia axyridis* (Pallas)

ベニヘリテントウ

*Rodolia limbata* (Motschulsky)

マクガタテントウ

*Cocimula crotchii* Lewis

ズグロツヤテントウ

*Serangium punctum* Miyatake

ヨツモンヒメテントウ

*Nephus yotsumon* (H.Kamiya)

ウスキホシテントウ

*Oenopia hirayamai* (Yuasa)

オオヒメテントウ

*Pseudoscymnus pilicrepus* (Lewis)

クビアカヒメテントウ

*Pseudoscymnus sylvaticus* (Lewis)

キアシヒメテントウ (ハレヤヒメテントウ)

*Pseudoscymnus hareja* (Weise)

ヨツボシテントウ

*Rhymatosternus lewisii* Crotch

オオテントウ

*Synonycha grandis* (Thunberg)

シロジュウゴホシテントウ

*Calvia quindecimguttata* (Fabricius)

ウスキホシテントウ

*Oenopia hiramai* (Yuasa)

ジュウロクホシテントウ

*Sospita oblongoguttata* (Linné)

ベダリアテントウ

*Rodolia cardinalis* (Mulsant)

キアシクロヒメテントウ

*Stethorus japonicus* H.Kamiya

ウンモンテントウ

*Anatis halonis* Lewis

ジュウクホシテントウ

*Anisosticta kobensis* Lewis

ムーアシロホシテントウ

*Calvia muiri* (Timberlake)

シロトホシテントウ

*Calvia decemguttata* (Linné)

\*シロホシテントウ

*Vibidia duodecimguttata* Poda

ヒメカメノコテントウ

*Propylea japonica* (Thunberg)

ナナホシテントウ

*Coccinella septempunctata* Linnaeus

アカイロテントウ

*Rodolia concolor* (Lewis)

ヒメアカホシテントウ

*Chilocorus kuwanae* Silvestri

アミダテントウ

*Amida tricolor* (Harold)

\*コクロヒメテントウ

*Scymnus posticalis* Sharp

次の種は当時のリストにあがっているが、現在のどの種に当たるか不明である。

アカスジヒメテントウ

ウスフタホシテントウ

クロオビテントウ

写真 1

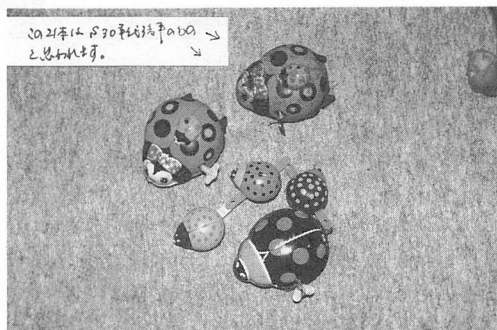


写真 2

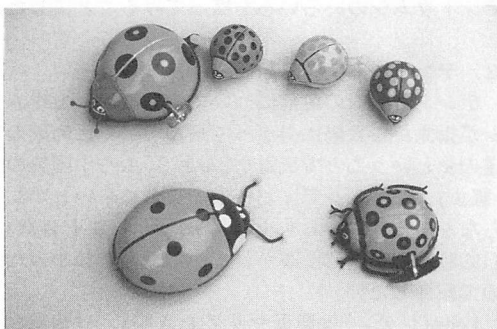


写真 3

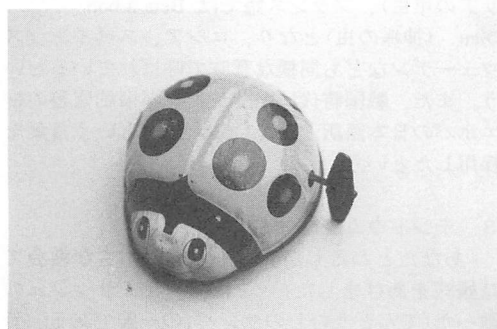
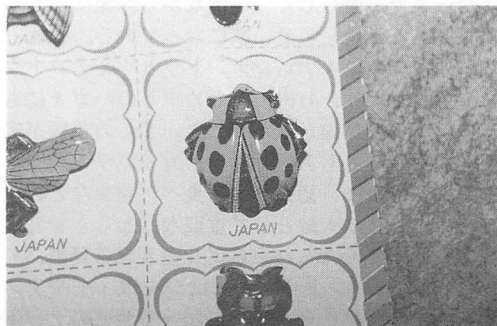


写真 4



注 \*印は兵庫県産ではあるが播磨地方には産しないもの。

#### 4. 民俗資料のいろいろ

当資料館に所蔵する資料をいくつかのグループに分けると次のようになる。

・生活用品・玩具類・工芸品・民芸品・文具  
・カード類・アクセサリー類などがあり、これらのテントウムシグッズを何回かに分けて紹介したい。今回はその第一回目としてブリキの玩具を紹介する。

#### テントウムシの玩具資料

##### ① ブリキの玩具

ブリキの玩具は筆者の子供のころから時々見かけたものだが、その多くは親子テントウムシとなっている。写真：1の右上とその左は親子テントウムシの2段式でゼンマイを巻くハンドルも金属製と樹脂製がある。どちらも昭和30年代後半に日本で製作使われたものらしい。また、下段のテントウムシの親子連なり玩具は同じく日本製で昭和40年代前半に使われたらしい。写真：2の親子連なり玩具は韓国製のものである。昭和の終わりこ

ろ時々土産物屋で見かけたことがあるが、最近はその姿を消してしまったようである。下段のものはチェコ製でゼンマイを巻くと動き出す。テーブルの下などに落ちないように工夫がしてあるブリキ玩具で最近のもの。その右は中国製で点々模様が数多くあり面白いが最近どこにも販売されていない。写真：3は昭和30年代前半の日本製ゼンマイ仕掛けのブリキ玩具。写真：4はテントウムシバジである。昭和40年ころのもの。ブリキ玩具の年代考証は日本玩具博物館の井上館長及び学芸員の尾崎織姫氏にお世話になった。感謝申しあげる。

#### <参考資料>

- 高橋壽郎(1958) 兵庫県産テントウムシ 兵庫生物 兵庫県生物学会  
日浦 勇(1978) 大阪の昆虫・陸生篇 I 大阪自然史博物館展示解説第4集  
小畑晶子(1998) テントウムシグッズ・コレクション 昆虫と自然33(4),p.26-29.

### 砥峰で採集した注目すべき蛾

兵庫県産蛾類分布資料・15

高島 昭

大河内町砥峰高原周辺で秋の蛾を調査するため、灯火採集を行ったところ次の注目すべき種を得ることができたので報告する。採集に用いた光源は白色蛍光灯、青色蛍光灯、ブラックライト各1本ずつ(いずれも20W)である。

オオバシマメイガ *Herculia orthogramma* Inoue

大河内町砥峰高原 12.X.1999,2♂

シマメイガの中でも最大級の種で、年1回秋に出現する。県下では黒田庄町、波賀町、南淡町で記録があるが少ない種である。

クロウスタビガ *Rhodinia jankowskii* (Oberthür)

大河内町砥峰高原 12.X.1999,1♂

兵庫県版レッドデータブックでBランクに入っており、年1回秋に出現する。山地性の少ない種で、これまで県下では波賀町、大屋町(未発表)で確認しているが、氷ノ山周辺以外では初の記録となる。

コケイロホソキリガ *Lithophane nagaii* Sugi

大河内町長曾 17.X.1999,1♂

山地性の少ない種で、県下ではこれまで筆者が大屋町横行溪谷で記録したものが唯一の採集例と思われる。

ムラサキシタバ *Catocala fraxini* (Linnaeus)

大河内町砥峰高原 12.X.1999,1♀

兵庫県版レッドデータブックでCランクに入っている。西南暖地では山地性の種で、県下ではこれまで波賀町で記録が多く、氷ノ山、鉢伏山でも記録がある。播州高原周辺では初記録である。

#### <参考文献>

- 相坂耕作(1981) 宍粟郡下でムラサキシタバを採集 てんとうむし7,p.40.  
藤平 明(1999) 淡路島南部の蛾,pp.96.  
木下総一郎(1979) 本州西部の興味ある蛾とその産地 蛾類通信101,p.1-2.  
岡本清・猪股涼一(1962) 兵庫県多可西脇地方の昆虫2(蛾類I) 兵庫生物4(3/4),p.154-178.  
高島 昭(1995) 波賀町引原ダム周辺における蛾相 第1報 きべりはむし23(1),p.6-16.  
高島 昭(1995) クロウスタビガの採集記録 きべりはむし23(1),p.31.  
高島 昭(1998) 西播地方で採集した注目すべき蛾 てんとうむし12,p.68.  
高島 昭(1999) 兵庫県波賀町で採集した注目すべき蛾 誘蛾燈155,p.17-24.  
高島 昭(1999) 兵庫県西部山地で採集した注目すべき蛾 誘蛾燈157,p.93-96.  
山本義丸(1956) 氷ノ山の蛾について(第二報) 兵庫生物3(3),p.121-123.